

志賀文学のユーモア

郭 南燕

(1996. 6. 29発表)

志賀直哉の文学は、『城崎にて』、『大津順吉』、『暗夜行路』のような内容が深刻で、周囲と自分自身を厳しく見つめる態度に貫かれる作品が主流である。しかし思わず読者を微笑ませるようなユーモアも少なくない。志賀文学を読む楽しみは、深刻な内容でやや肩が凝り出すと、時としてユーモアによって一息を入れる、というところにある。

この発表では、三つの短編小説の言動に見られるユーモラスな表現の一部分を取り上げる。そして志賀のユーモアは単に笑いに終わらず、感動を呼び起こすための伏線になっていることを見極めたい。

さて『鳥尾の病気』（『白樺』明治42・1）では、主人公の鳥尾は気難しく、しかも神経衰弱である。鳥尾と対照になっているのは呑気な「私」即ち山本である。展覧会に一時間半も遅れた山本を鳥尾は憤慨して、「君は到底人生の弱者である」という過激の言葉で罵る。

やがて山本は神経衰弱がひどくなった鳥尾を旅に連れ出すことになる。鶴沼に向かう汽車の中で、鳥尾は品川まで「気焰をはいて貴族を罵」る。一方、山本は悠然たる態度を失わず、鳥尾を相手にしない。鶴見駅から魚屋の爺さんが乗り込んで来た。その着物から発散する「生臭い臭でムセルやうな心持が」して、山本は席を移ろうとしたが、貴族主義批判をしている鳥尾の前でそれを言い出せない。鳥尾も自分の言葉に束縛されて、席を変えることができなかった。

東神奈川まで黙ってきた鳥尾は、顔色が悪くなり、「いやに白い額から油汗」が垂れて、意識不明になる。新橋から品川までの距離と、鶴見から東神奈川までの距離とは大体同じで、いずれも5キロぐらいである。つまり、鳥

尾は新橋から品川まで貴族主義を批判したため、鶴見から東神奈川までいやでも平民の生臭い匂いを我慢せざるを得なかった。志賀直哉は、このような同じ距離の空間を二つ設置することによって、鳥尾のやせ我慢の苦しさを描いている。

山本は意識不明になった鳥尾を心から心配して、「起てないか？」と繰り返して聞いているうちに、「吾ながら此声が悲しく聞こえた」と思い、「しつかりしろ」と言う「声がふるへてゐる」ように感じた。そして、鳥尾の脈拍を調べたが、「脈はくがない——ない筈はなかつたから、さう思つたのだ——兎に角私は狼狽しきつてゐるのだ。」と言う。山本はすっかり顛転倒している。生まれつきの呑気さを忘れて、鳥尾を無我夢中に介抱する山本の必死な気持ちが伺える。

医者所で鳥尾は無理に我慢していたことを初めて告白した。なぜそうしたのかと医者に聞かれて、鳥尾は「チラット笑つたやうな眼で」山本を見た。山本は「其時私は可笑しいやうな嬉しいやうな、妙なコングラカッタ気分で涙さへ浮んだ。」と語っている。鳥尾の目付きには、貴族主義批判の言葉が自分自身に祟ったことを反省する気持ちが現れているため、山本は感動したのである。ここでは、鳥尾と山本は初めて心を通わせることができた。この小説で最も読者を感動させるのは次の部分である。午後、二人は無事に鶴沼に着いた。その途中、

「あの儘になるのかと思つた」と云ふ言葉は幾度か繰り返された。私も云つた。彼も云つた。

二人はこのような短い言葉を繰り返すことによって、山本の心配、鳥尾自身の恐怖、山本への感謝を表している。これは友情に対する再三の確認でもあった。ちなみに鳥尾のモデルは志賀自身である。山本のモデルは志賀の友人、『白樺』派の歌人木下利玄である。

『或る朝』（『中央文学』大正7・3）は有名な小説である。祖父の三回忌の法事のある朝、寝坊をしている信太郎はいくら祖母に起こされても、起きる気配を見せない。それどころか、起きられないのを祖母のせいにする。信

太郎のモデルは志賀である。当時の志賀は二十五、六歳の青年なのに、法事の時に寝坊をしてしまい、しかも祖母と喧嘩する。そのようないかにも常識はずれなことを平気で細かく描く志賀の態度そのものがユーモラスである。

信太郎は祖母の言葉尻を一々捕らえて、「一時にねて、六時半に起きれば五時間半だ。やくざでなくても五時間半ちやあ眠いでせう」とか言う。理屈では孫に勝てないのを知り、祖母は情を持って孫を動かそうとした。しかし信太郎は祖母が布団を畳むのを手伝ってくれない。祖母は怒り出して「不孝者」と言う。信太郎は即座に「年寄の云ひなり放題になるのが孝行なら、そんな孝行は真つ平だ」とやり返す。信太郎は起きずに、祖母を怒らせることばかりを工夫する。信太郎は無反省の人物として表現されている。

しかし、次の場面では一転して信太郎は如何に繊細な感情を持っているかが描かれている。

彼は毎朝のやうに自身の寝床をたたみ出した。大夜着から中の夜着、それから小夜着をたたまうとする時、彼は不意に『ええ』と思つて、今祖母が其処にはふつたやうに自分も其小夜着をはふつた。

同じ習慣を見つけたところで、信太郎は改めて肉親の絆を意識したのである。だが祖母を心配させるために、「諏訪へ氷滑りに行つてやらうかしら」と思う。心配させることによって、祖母の関心を引き寄せようとするのは甘えの心理の現れである。勿論、この甘えは祖母への愛情の裏返しでもあった。

間もなく祖母は仲直りを求めにきた。「信太郎は急に可笑しくなつた。旅行もやめだと思つた。其処に苦茶苦茶にしてあつた小夜着を取り上げてたたんだ。敷布団も。それから祖母のものもたたんでみると彼には可笑しい中に何だか泣きたいやうな気持が起つて来た。涙が自然に出て来た」。ここでは、自分の小夜着と祖母のとを同時に畳むことによって、祖母の気持ちを暖かく受け入れようとしている。信太郎は祖母との争いを通して、ふだん気にも留めなかった祖母と自分との同じ習慣に新たに気がつき感動するのである。信太郎の理不尽で、無反省で、甘えん坊の言動がユーモラスだったため、この部分での気持ちの微妙な揺れが感動的に伝わってくる。

『寓居』（『新潮』大正10・1）の主人公幸輔のモデルも志賀である。幸輔

は三十二、三才ぐらいで、東京出身の金持ちの坊っちゃん、作家で、大変な癩癩持ちである。一方、辨というお手伝いの婆さんは生粋の京都人で、世話好きの善良さがあると同時に大変なお喋りである。二人はお互いの言葉遣いに疎いため、意志疎通ができない。辨が「お召しものはひきずりでよろしうおすか？」と言ったら、幸輔はその言葉が分からなく、いらいらする。辨の説明で意味がようやく分かったが、また辨の余分な言葉に悩まされる。二人の会話には幸輔と辨との性格の違い、身分の違い、立場の違いがよく現れている。幸輔はなるべく簡潔に言おうとして、切り口上で話す。一方、辨は機会さえあれば、必要以上にしゃべる。このような二人の会話を延々と書いたのは、その滑稽さを志賀自身がはっきり意識しているからである。

夜、外から帰ってきた幸輔の気分は大分直ったが、二人の会話が始めるとまた齟齬が生じる。それから、幸輔は本を読んでいるうちに、うとうとし始めた。辨は「風邪をひくから眠るなら、床へ入らなければいけない」と「年寄の特権でもあるやうに、同時に其特権を楽しむやうに、毎時になく強硬な態度を示し」て、幸輔に命令する。この時、幸輔の中に辨の年齢への意識が初めて生じたために、その態度も変わり始める。「そんなら、床に入る。然しお前も早く寝て了へ」と一言。これは辨に対する思いやりを表す初めての言葉であった。辨に羽織を脱いでくれと催促されて、「うるさい奴だな」と言いながら、羽織を床の中からほうり出す。これは年寄りの辨に対する甘えとも見られる。気の短い幸輔とおしゃべりの辨とのやり取りがユーモラスに描写されてきたため、結末のこの簡単な言葉から、辨に対する幸輔の思いやりをはっきりと感じ取ることができる。その思いやりは二人の生活の微笑ましさを保証し、結末を感動的にする。傲慢な話し方の裏に隠れている優しさがこの小説の素晴らしさである。

以上のように、短編で、これだけ豊富な内容と意外な結末を盛り込めたのは、ユーモアが感動を引き出すための隠し味になっているからである。もう一つ注目すべきなのは、主人公たちはみな志賀自身をモデルにしていることである。ユーモラスな表現をもって自分自身を描いていることも志賀文学の一つの特徴である。